

〈実践報告〉

幼稚園における文楽人形劇の試み

Attempt of Bunraku puppet theater in kindergarten

片山 剛¹

要旨

幼稚園における人形劇というと、紙人形（ペープサート）、指人形、棒遣い、糸操りが代表的なものであろうか。また、紙芝居も、人形劇といってしまうと語弊もあろうが、紙に描かれた人物等の動きを演劇的朗読によって見せ、聴かせるものという意味では似通った性格を持っている。人形劇は幼稚園教育に欠かせない重要な役割を担うのである。

かつて本学でおこなっていた文楽人形の実習とその成果発表を継承する形で、筆者は6年にわたって奈良市の幼稚園で、本来の文楽とはタイプの異なった劇（仮に「文楽人形劇」と言っている）を上演してきた。本稿はその実践報告である。

キーワード：文楽人形、幼稚園、人形劇、朗読、生涯学習

Bunraku puppet, Kindergarten, Puppet show, Reader's theatre,
Lifelong learning

はじめに

かつて本学に設置されていた人間社会学部人間社会学科には、文化表現コースがあり、学生は文学、美術、写真、映画、演劇などを学びつつ、実作、実演もあわせておこなっていた。筆者は「伝統芸能演習」という授業を担当して、文楽人形遣い吉田勘弥師¹⁾の指導を仰ぎつつ、文楽人形の遣い方を学ばせた。そして教室にとどまらず、高齢者施設、社会人大学、知的障害者の集い、小学校の学童保育や地域コミュニティの催し、児童センターの催し、大阪府の消費生活啓発事業、学会の催し、あるいは大学祭の舞台などで実際に上演する試みを繰り返した。それが可能であったのは、かつての金蘭短期大学国文科の卒業生による寄付金が相当額積み立てられていて、国文科廃止の際に記念になるものを購入することになったからである。当時国文科に勤務していた筆者は、国文科の記念としてのみならず、入れ替わりで設置されることになっていた人間社会学科の教育のためにも「娘首（むすめがしら）」の文楽人形の購入を主張、その希望が叶えられたのであった。

このような経緯で入手した娘人形に加えて、その相手役を担う男の人形を、今度は人間社会学科

として首（かしら。頭部）と胴、手足の部分を購入してもらった。予算の関係で、首は「ツメ」と呼ばれる「その他大勢」の端役に用いられるもの、髪は実際に結われた髪ではなく塗りである。衣装については吉田勘弥師の並々ならぬご配慮、ご指導をいただいて自主制作したものを用いている。

前述のような催しは、当初予想もしていなかった反響があって、テレビ、ラジオ、新聞、海外の雑誌²⁾などに紹介されたのみならず、それらの情報を知られた方から地域の催しに誘われるなど、少なからず社会の関心を得ることができた。

人間社会学科は後継の現代社会学科を経て廃止となり、学生による文楽人形の授業は終わりを告げた。せっかくの人形もお役御免でケースにおさめられて正面玄関にでも展示される宿命かと思われたが、ここに一筋の光明が射し込んできた。人間社会学科では歌人の木村友紀氏³⁾が非常勤講師として「文芸創作演習」を担当してくださったのだが、関西の芸能諸般を対象とした分析、紹介、批評などで輝かしい業績を挙げた雑誌『上方芸能』⁴⁾の元編集者でもあった木村氏は、文楽人形劇の試みにも関心を持ってくださっていた。それが縁となって、木村氏のご子息が通っていた幼稚園で文楽人形劇は再び日の目を見ることになったのである。

1 Takeshi KATAYAMA 千里金蘭大学 教養教育センター

受理日：2016年9月10日

1 文楽人形劇実施の経緯と概要

2016年6月30日、木村氏にこの企画の成り立ちについてうかがったので、まずそれを記しておく。奈良市立富雄第三幼稚園（奈良市帝塚山。企画の出された2011年当時は北田和美園長）では、従来「育友会」（PTA）の事業として人形劇団などに出演を依頼していた。その話し合いをする過程で、木村氏がかつて『上方芸能』誌の編集者であったことを知る人から「文楽はできないのか」という意見が出たという。そこで筆者が木村氏から予算も含めて相談を受け、プロの文楽技芸員ではなく、アマチュアによる創作人形劇であれば可能とのお返事を差し上げた。しかし、新規の企画を実施するには相当なエネルギーが必要で、園としても手間のかかることでもあり、また木村氏がそのあと役員を離れたため、次年度役員の判断を待たねばならず、実現するかどうかはかなり微妙な情勢になった。しかし最終的に次年度の育友会は実施を決め、木村氏経由で筆者に依頼があった。2011年夏のことであった。

筆者は、それまでの経験から

- ①人形劇についてわかりやすく解説する
- ②創作人形劇の上演
- ③人形と一緒に手遊び歌を歌う

という三部構成を提案、幼稚園側からも全面的に受け入れられ、形式が固まった。

①の人形劇についての解説は、文楽人形という馴染みの薄いものに親しんでもらうことに第一の目的があった。指人形、ペープサート、棒遣い、糸操りに比べて圧倒的に大きい文楽人形の三人遣い（一体の人形を三人で動かす文楽の技法）の動きがどのようになされているかを示し、他の人形劇との違いを感じ取ってもらうことである。

第二に、そのあとの芝居に出てくる人物や小道具などを紹介することであらかじめ理解を深め、劇に興味を持たせる意味もある。主人公は山の麓に暮らす「ごんべえ」といい、園児から見るとおおむね祖父の世代にあたる。もう一体、若い娘の



ごんべえ



娘

人形は演技の困難さゆえに当初は解説でのみ使用していたが、第5回の催しからは劇中人物として登場させた。

登場人物の姿（髷を結び、着物を着ている）から明らかのように、このあと上演する劇は「おさむらいさんの時代」（江戸時代）をイメージしたもので、古い道具なども出てくる。たとえば電気掃除機ではなく箒やはたき、旅行かばんではなく振り分けの荷物、タクシーではなく駕籠といった具合で、これらを解説の中に取り込むことによって劇に自然に入り込めるようにしたのである。しかし解説は説明的になると退屈に墮するので、園児にとって身近な道具を参考に用いたり、クイズ形式を取り入れたりする工夫を凝らした。

②の創作人形劇は、この催しのメインになる。「文楽」というと伝統芸能、すなわち古典劇のイメージがあるが、古典劇をそのまま見せることはできない。文楽は本来子ども向けの芝居ではないこと、上演時間が長過ぎることが大きな理由である。そこで、15分以内に収まる劇を創作し、文楽本来の義太夫節ではなく朗読劇によって演ずることにした。あえて「文楽人形劇」と称する所以である。それ以前のさまざまな催しでも「高齢者」「高校生」「小学生」など対象を設定した上で朗読劇による上演をしているのだが、初めての経験である幼稚園児に理解できる語彙の範囲で、という制約には苦勞することが多かった。ただし、「かたきうち」「鍬（くわ）」など昔の風習や道具の名前などで難解な言葉については解説を活用してある程度説明しておいた。

③の手遊び歌は、園児と人形、出演者が一体となって歌を歌い、手遊びをするという趣旨で、催しのフィナーレを華やかに飾る意図がある。全員が起立して「大きな栗の木の下で」「おべんとうばこのうた」「カレーライス」など、子どもたちがよく知っている歌を合唱し、振りも付けるのである。人形が自分と同じ動きをしている、すなわち人形とひとつになれたという満足感を園児たちに味わってもらえればと考えたのである。

2 第1回の詳細

以下、紙数の関係ですべてを詳細に書くことはできないので、第1回、第4回を中心にその実践について記録しておく。

幼稚園からの正式の依頼があったあと、誰が人形を遣うのか、どういう演目を実施するのかなど何も決まっていない状態からのスタートであった。一時は一般の方からボランティアを募ることも考え、いくらか打診もしたのだが、稽古時間の問題や、稽古場が吹田市で本番は奈良という地理的条件もあって断念せざるを得なかった。その一方、この年は現代社会学科最後の学生がわずかにいるだけで、協力者を募ることは困難かと思われた。しかし最終的に4人の学生の協力申し出があって、最年長であったMさんがリーダーとなって全体を引っ張ってくれた。

9月から10月にかけて学内で何度も稽古を重ねたが、学生は人形の基礎的な動きはすでに体験していたので、演技について要求したことにすばやく反応してくれた。稽古以外でもいつでも話せたため、意思の疎通も図りやすく、ある程度の自信を持って本番に臨むことができた。

本番は10月21日。全体のタイトルは「ぶんらくにんぎょうとあそぼ」と決めた。当日は早めに行ってリズム室と呼ばれる広い部屋で舞台設定をおこない、園児が約50人、先生方や保護者、近隣住民の方々が約30人で部屋はほぼ満員になった。園児はともかく、これほど一般の見学があるとは予想していなかった。

まず、ひな人形、ぬいぐるみ、きぐるみ、マリオネットなど、人形のさまざまを紹介した上で文楽人形を見せた。その大きさや古風な出で立ちを見て怖がる園児がいるのではないかと案じたが、それは杞憂であった。

次に人形が小道具を用いずに「ある動き」をする様子を見せて、何をしているところかを当てさせるクイズ形式で人形の遣い方（動かし方）の解説とした。具体的には「電話をかける」「手紙を書く」「キセルでタバコを吸う」というもので、園児には難題と思われる「キセル」に関しては、見学に来られている大人の方々に問いかける意図があった。というのは、大人の見学者が第三者として壁越しに「覗き見」しているのではなく、自分たちもこの催しに積極的に加わっているのだと感じていただくためであった。幼稚園の催しであると同時に「地域の催し」でもあるという暗黙のメッセージを送ったのである。

女子学生は園児にとって「おねえさん」としても親しみやすい存在である。学生もまた全員にこやかな表情を崩さずに振る舞ってくれたうえ、

全体の進行を担当したMさんの園児への語りかけが明るく楽しげで、この時点ですっかり打ち解けた雰囲気になった。

次に人形による手品。昔のドーナツ盤レコードを使った古典的な手品で、黒いレコードをジャケットに入れて、黄色のハンカチを穴の中に通し、改めてレコードを取り出すとレコードが黄色く変化しているというものである。単純な手品だが、細かい動きゆえに人形の動きに注目が集まり、高齢の見学者の方が驚いて大きな拍手をくださった。



手品



肩に乗る雀

次に小道具の説明。きのこ、おにぎり、雀、傘、杖などを見せると、その都度歓声が挙がる。特に差し金⁵⁾を使って雀を飛ばすように見せるのが珍しかったようである

ここまででおよそ20分、5分ほどの休憩を入れて、文楽人形劇の開演である。演目は「ごんべえさんとやまのかみさま」。ごんべえが山へきのこを採りにいくが、2つで足りるところをうっかり余分に採ってしまった。すると雷鳴が轟き、大雨となるが、結局ごんべえは山の神様に救われる。

以下、その台本である。

ごんべえさんは、おばあさんといっしょに、すたこら山のふもとで暮らしています。

いつもは田んぼでお米を作って、ときどき山の中に、くだものや食べられる草、きのこなどを採りに行きます。

今日もごんべえさんは杖をついて、すたこらさ、よっこいしょ、ふう、すたこらさ、よっこいしょ、と、すたこら山に登ってきました。ごんべえさんは、途中で柿の実を二つ、栗の実も二つ採りました。この山では、春には桜が咲き、夏には蝉が鳴き、冬には雪が積もり、そして秋にはたくさんのくだものやきのこが採れるのです。こうしてごんべえさんは、この山に登ると必ずお弁当を食べるすたこら丘までやってきました。

「さあて、もうお昼じゃな。そんたら、お婆さんの作ってくれたおにぎりをいただくことにしよう」

ごんべえさんはおにぎりを取り出して食べよう
としました。するとそこに「ちゅんちゅん、ちゅ
んちゅん、ごんべえさん、ちゅんちゅん、お米を
ひとつぶ、ちゅんちゅん、くださいな、ちゅんちゅ
ん」といって雀が二羽やってきました。お母さん
雀と子雀でしょう。

「おお、来たか、来たか。よしよし、そうれ。お婆
さんの作ったおにぎりじゃ。うまいか、うまいじゃ
ろ、ははは」

「ちゅんちゅん、ごんべえさん、ちゅんちゅん、お
ばあさんにも『ありがとう』って、ちゅんちゅん、
いってくださいね。ではさようなら、ちゅんちゅん」
雀たちは喜んで帰っていきました。

「さあ、きょうはきのこをいただいて帰ろう。ええ
と、このへんに…おお、あった、あった。それっ。
ははは、大きなきのこじゃ。おばあさんの料理が
楽しみじゃのう。こっちはどうかな。おお、こっ
ちにもあったぞ。それっ。よしよし。おや、あそ
こにもあるぞ。それっ。これでよし。えっと、こっ
ちはお婆さんの、これはわしの。おや、ひとつ余っ
てしまうな。う～ん、よいわ。今日はこれくらい
にして帰ることにしよう」

こうして、ごんべえさんがきのこを持って帰ろ
うとした、そのときです。

ポツッ、ポツッ。おや、雨が降ってきました。
そして、遠くからごろごろごろという音が聞こえ
てきます。ごろごろごろごろ。

「こりゃたいへんだ、雷様じゃ」

ごんべえさんが荷物をまとめて逃げようとする
と、雨はどんどんひどくなってきました。ポツポ
ツという音がシャーッという音になり、やがてザ
アザア、ゴロピカ。そしてとうとう、ゴーッ、ド
ンドンドン。

「雨じゃ、雷じゃ、助けてくれ、助けてくれ。助け
てくれ、助けてくれ……」

ごんべえさんはうろうろするばかりです。

雨と雷はますます激しくなってきました。

「助けてくれ、助けてくれ、神様、仏様、助けて
くだされ、助けてくださりませ、助けてくだせえ、
助けて下せえ…」

ごんべえさんは神様にお祈りをしましたが、雨
も雷もやみません。ごんべえさんは怖くて、寒くて、
「助けてくだせえ、助けてくだせえ、たすけ…」

とうとう倒れてしまいました。

山の神様がその様子を見ていました。

「ごんべえはいつも山の動物をかわいがって、くだ

ものやきのこも、自分たちの食べるだけのものを
持って帰る。山を荒らしたり、生き物をいじめたり
せず、大切にしてくれる。うーん、よし、助けて
やろう。それっ！」

山の神様が合図をすると、どこからか傘が飛ん
できました。ぐるぐるぐるぐるぐる傘が舞います。
ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる……。そしてその
傘はごんべえさんの頭の上でぴたりと止まりました。

やがて雨がやみました。神様のおかげであまり
濡れずに済んだごんべえさんは、ふと目を覚まし
ました。もう命はないと思っていたのに、助かっ
たのです。

「おお、生きとる。わしゃ生きとる。生きとる、生
きとる。あのひどい雨と雷の中で。おや、この傘
はなんじゃ。ああ、山の神様がおめぐみくださっ
たのにちがいない。ありがとうございます、あり
がとうござえます」

ごんべえさんは山のとっぺんに向かって何度も
何度も頭を下げました。

「ありがとうございます、ありがとうございます
……」

ごんべえさんは荷物をまとめて帰る用意をし
ました。そして、さっき採ったばかりの3つのきの
このうち、1つを元に戻しておきました。

すっかり晴れあがった空の下、

「おお、あんなところに、きれいな虹が」

ごんべえさんは着物の汚れを払って荷物を持ち
ました。

そしてゆっくりと、ゆっくりと山を降りていき
ました。ゆっくりとゆっくりと、ゆっくりと、ゆっ
くりと……

途中で、すたこら山の神様にもう一度「ありが
とうござえました」と頭を下げて、また歩き始め
ました。ゆっくりとゆっくりと、ゆっくりとゆっ
くりと。

ごんべえさんは、家に帰ったら、このできごと
をおばあさんに話してあげよう、と思っています。

(おわり)

人形は二人遣い⁶⁾、小道具の出し入れや雀を飛ば
したり「救いの傘」を持って駆け巡ったりするサ
ポートが二人。語りとカゲ⁷⁾は筆者が担当した。

上演時間は約13分。山という自然と人間の共生
がテーマであり、ごんべえは山の恵みを受け、山
を愛してもいるが、うっかり間違いを起こしてし

まった。そんなとき、自然のしっぺ返しにも遭うが、ついには救われるのである。Mさんが最後に「ごんべえさんはどうしてきのこをひとつ置いていったんでしょうね？」と問いかけると、ある園児がすかさず「神様にあげた！」と答えていた。正解などあるはずもないが、園児がこのように感じ取ってくれたことは大きな収穫であった。

最後に全員で「ばんだ うさぎ こあら⁸⁾」と「おべんとうばこのうた⁹⁾」の手遊び歌を歌い、さらに全員で写真撮影をしてお開きとなった。全体で50分ほどの催しであった。

このときの様子について、Mさんは次のような回想を本稿に寄せてくれた。

「文楽人形を怖がる園児がいないか、私たちの演技でほんとうに楽しんでもらえるのか、心配でした。でもそんな心配が吹き飛ぶくらい興味津々といった様子で観てくれました。人形を遣ううえで苦労したのは、左手で支える人形の重さと、左遣いの人に合図を出すタイミングの難しさなどでした。劇はわかりやすい内容だったので、理解してくれたと思います。人形が何をしているのかが伝わるととても楽しいです。キセルを吸うシーンで園児が『タバコ吸ってる!』と言ってくれたのを覚えています」。

3 第2回と第3回の概要

1回目の催しで責任は果たせたのでこれで終わるものだと思っていたが、北田園長から「来年も来てほしい」とのお言葉があった。しかし翌年は学生がいなくなるため、実現は困難だろうと思われた。

翌年、北田園長から再度の上演依頼があったので、学生がいなくことを説明して「もしそちらの地元の方で協力してくださる方があれば」とお返事を差し上げた。すると早速募集してくださって、7人のボランティアの方（すべて女性）と幼稚園の役員さんなど合計20人ほどで実施することになった。3回の稽古で本番（本番の日の早朝から通し稽古をしたが）という、かなりの強行軍である。

第2回は2012年11月30日。観客は園児を含めて90人以上。前年より一般見学者が多く、前年度役員の方も来られた。全体の構成は前回と同じで、人形の動きによるクイズは「扇子であおぐ」「本を読む」「裁縫をする」の3つ。裁縫の動作は第1回の「キセル」同様、大人対象のクイズにした。文

楽の人形遣いが着ける「黒衣（くろご）」「頭巾」も紹介し、芝居では人形を遣う方々に実際に着ていただいた。これらも人間社会学科時代に購入（黒衣）、作成（頭巾）したものである。

上演したのは「いけにもぐったごんべえさん」。そのあらすじは次のとおり。

魚釣りに行ったごんべえがうっかり池にペットボトルを捨ててしまう。魚が釣れないため居眠りをしていると魚のコイタロウがやってきて、魚大王が呼んでいるから来てほしいと声をかける。ごんべえは浦島太郎の昔話を思い出し、喜んでついていく。ところが魚大王は饗応してくれるどころか、ペットボトルを池に捨てるのはけしからんと怒り、ごんべえは魚たちにつつかれる。そこでごんべえは目が覚める。夢だったのである。

前年同様、人と自然の関わり、自然を大事にする姿勢をテーマにした。演者の技術の問題もあるので、できるだけ座った姿勢の演出にしたが、水中を泳ぐ動きなどで変化を付けた。コイタロウ、魚大王、魚たちは小道具として新たに製作していただいた。これをきっかけに、小道具製作がこの催しの重要な役割となる。

手遊び歌は「ぐーちょきば¹⁰⁾」。

ボランティアの方々からは次のような感想をいただいた。

- 稽古のないときもイメージトレーニングをしていた。
- 子供たちの反応のよさに感動した。
- みんなで一つのことを築けて楽しかった。
- 貴重な体験でいい思い出になった。
- 久しぶりに緊張感を味わった。
- 終わって寂しい。

なお上演翌日の12月1日付奈良新聞に写真入りの記事が掲載された。

翌年は園長の交代があり、峯園裕美園長が就任された。峯園園長も「これは貴重な催しだ」と継続を希望された。ボランティアの方も増え、特に小道具についてはきわめて精巧なものを作っていた。また、自分たちの着る黒衣を作りたいと、頭巾とともに製作して下さった方もあった。

第3回は2013年11月29日が本番。動きを当てるクイズでは「手紙を書く」動作に対して「パン粉をつけてる」と答えた園児がいたのが印象的であった。こういう回答が今後の工夫のしどころと

して思いがけないヒントを与えてくれることもある。この年は筆者の事情で新作を作ることが困難となり、初年度の「ごんべえさんとやまのかみさま」に手を加えたものを上演した。ごんべえがやまのかみさまと「やまびこ」の形でやりとりする場面を入れたのが大きな変更点であった。



手作りの柿の木



駆け寄る園児たち

小道具については筆者自作のものもあったのだが、すべて新調してくださり、きのこや雀、また前回はなかった柿の木などとても色鮮やかで立派なものであった。

手遊び歌は「おべんとうばこのうた」。

写真撮影のあと、子どもたちは必ず一斉に人形に駆け寄ってくるのだが、この年もなかなか人形から離れようとしなかった。

一般の観客はさらに多くなり、園児を含めると100人に達したと思われる。なおこの日は奈良市教育委員会の方が視察に来られた。

4 第4回の詳細

第4回は2014年7月3日。

第2回と第3回を実施して、やはり稽古時間の少な過ぎることを痛感せざるを得なかった。そこで第4回からは、丸1か月を稽古に費やし、5週目に本番をすることにした。といっても筆者が奈良まで行けるのは週に1度、あとは自主練習をしていただくのである。

筆者が稽古に行く回数が1回増えたことによって、動きを複雑なものにすることを試みた。最も大きかったのはごんべえの人形に足をつけたことである。これまでは協力者の人数の問題と稽古の困難さゆえに二人で人形を動かし、足はなく、動きがかなり不自然なものであった。この回から足の遣い方も研究していただいた結果、動きがより自然に、しかも大きくなったのである。

稽古が1週間長くなって、小道具も製作期間が増えたためにさらに精巧なものを工夫していた

けた。キュウリが一晩で成長する場面があるのだが、筆者は一株がするすると伸びるようにしていただくつもりであった。ところが出来上がったものは舞台のほぼ半分の大きさのネットにキュウリがたくさん実っているものであった。

もうひとつ、この時に新たなキャラクターである「もぐらのモグリ」を作っていただいた。人間のことばを話し、魔法の使える女の子のもぐらという設定で、呪文を唱えると不思議なことが起こり、ごんべえの手助けをするのである。思いがけず評判がよく、また登場人物を容易に増やせない事情もあって、このはりぼての人形はこれ以後レギュラー出演者になる。なお、舞台が自宅になることもあって、ごんべえは独居しているという設定に改めた。

今回は最初に江戸時代の生活の話を少ししてみたが、特に年少組には退屈だったかもしれず、反応がやや鈍かった。内容は昔の子どもたちの遊び、お金の種類、掃除の仕方、旅の姿などをクイズ形式で紹介するものであった。遊びについてはシャボン玉も取りあげ、司会者が娘の人形に「人形だからシャボン玉は吹けませんね」と声をかけると、人形が「私にもできる」というそぶりを見せる。そしてストローを取り出すと、人形は見事にシャボン玉を吹いて見せた。次の写真右端の黒い部分にわずかに見える白い影がシャボン玉である。



もぐらのモグリ



シャボン玉を吹く

これは簡単な仕掛けで、シャボン玉のストローの吸い口にビニール管（金魚鉢の酸素を送る管を使用）をつけて長く伸ばし、その先をビニールプール用の空気入れにつなげ、合図とともに蔭にいる人が空気入れを押すのである。ビニール管は人形の振袖の中から出し入れするので全く見えず、客席からは「どういうこと?」「すごーい」という声が挙がった。大人の見学者も見入って大きな拍手をしてくださった。空気を出す強さが難しく、稽古では失敗を重ね、結局本番が一番うまくいったのであった。

いよいよ芝居が始まる。今回は「ごんべえさん

のおむすびころりん」を創作した。

以下、その台本である。

ごんべえさんは野菜が大好きです。なすび、トマト、ほうれんそう、そしてキュウリなど、包丁でトントントンと切ってそのまま食べたり、お漬け物にしたり、お味噌汁に入れたり、いろいろな料理に使っています。そこで、自分の家の庭でもキュウリを作ってみようと思って、春に種を蒔きました。でも、どんなに待っても、ちっとも大きくなりません。

今日もお昼になったので、ごんべえさんは仕事の手を休めて庭に出て様子を見ました。でも、キュウリの姿はどこにもありません。ごんべえさんがっかりして縁側に腰を下ろし、夕べのごはんの残りで作ったおむすびをひとつ取り出しました。「おかしいな。種を蒔いたらキュウリができるはずなんじゃが。もぐもぐもぐ。おかしいな。お隣のたろべえさんのキュウリは、もぐもぐもぐ、どんどん大きくなって、もう花が咲いたと言ったのに。…おかしいな」

おむすびを食べながら、ごんべえさんはどうしてキュウリができないのか、あれこれ考えていました。あんまり一生懸命考えたので、ごんべえさんは、うっかり手をすべらせて、おむすびをコロリンと落としてしまいました。

「おっと、これはうっかりしていた。ははは。どっこいしょっと」

ごんべえさんが拾おうとすると、おむすびはコロコロ、コロリン。

「こりゃこりゃ、どこへいく」

と、また拾おうとすると、コロコロ、コロリン。

「こりゃ待て。おや？ こりゃ待て。あれ？ こりゃ、こりゃ、こりゃ待て。ありゃりゃ、あの穴の中におむすびがころりと落ちてしまった。どうれ、どこへいったかな。ん？ ん？ ありゃ、すす、すす、吸い込まれる～～」

と言ったかと思うと、ごんべえさんは穴の中に吸い込まれ、ごろごろごろごろ、どっすん。

「いててて、ああ、びっくりした。おや、ここはどこじゃ」

ごんべえさんが不思議に思ってきょろきょろ見回していると

「ごんべえさん。ようこそいらっしやいました」

と、なにか小さな動物が出て来ました。

「ん？ おまえは誰じゃな」

「はい、私はもぐらのモグリンです」

「モグリン。そのもぐらがわしに何の用じゃ」

「はい、さっき、ごんべえさんのおむすびが私の家にコロコロコロリンと転がって来ましたので、おいしくいただきました。ごちそうさまでした」

「おお、そうかそうか、いやいや、もったいないことをしたと思ったが、モグリンが食べてくれたのならよかった、よかった。実は、ちょっと考え事をしていたので、うっかり落としてしまったのでな」

「ごんべえさんは何を考えていたのですか？」

「うん、今年から庭で野菜を作ろうと思ってな。キュウリの種を蒔いたんじゃ。でもちっとも大きくなりませんので、おかしいな、とっていたんじゃよ」

「はははは」

「おいおい、モグリン。何がそんなにおかしいんじゃ」

「これはこれは、笑ってごめんなさい。いえね、私はごんべえさんの家の庭で暮らしていますが、土が堅くてやせていて、その上、水も足りないので『これじゃあ、おいしい野菜は作れないだろうなあ』とっていたのです」

「ほう、ということは、土がいけなかったのか。むう、そんならどうすりゃ、ええんじゃ？」

「はい、まず大事なことは、土をしっかり耕すことです」

「耕す？ というと、土を掘って柔らかくするんじゃな」

「はい、土をふかふかのお布団のようにするのです。そして、水や肥やしをまいて、キュウリの種が元気よくおとなになれるようにしてやってください」

「肥やし、というと、ああ、土が元気になる、ご飯のようなものじゃな」

「そうですとも。そうだ、今日、おむすびを下さったお礼に、これこれ、この鍬（くわ）を差し上げましょう。これでしっかり庭の土を耕してください」

「いやいや、鍬ならわしも持っておる」

「まあ、そうおっしゃらずに。この鍬には土の肥やしになる魔法の粉をパラパラッとかけてあります。この鍬で畑を耕したら土が元気になってキュウリも大きくなりますよ」

「そりゃ、すばらしい。ではありがたくいただきますよ。ところで、わしはどうやったら家に帰れるんじゃ」

「はい、私がおまじないをすれば、あっという間に

帰れます。それじゃあごんべえさん。また会いましょう」

「おお、モグリも元気だな」

「はい。『もぐりん、もぐりん、ぐりりんぱ。ごんべえさんをお見送り』」

モグリが不思議な言葉を唱えると、ごんべえさんは、

「おお、おお、おおお」

と、あっという間に自分の家に帰ることができました。

元の庭に戻ったごんべえさんは、今日の出来事を思い出して、

「今日は不思議な日だったな。でも、夢じゃないぞ。これこれ、こうしてモグリがくれた鍬がある。モグリと仲良くなれて、よかった、よかった。さて、それではモグリの言っていたように、この魔法の粉のついた鍬で庭の土を耕してみよう。さ、いくぞ、そりゃこそ、よいしょ、そりゃこそ、よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ。ふう、ふう、野菜作りは大変な仕事じゃ。腰もだるいし、肩も痛い。それに、一人ではどうも力が入らんなあ。そうじゃ、富雄第三幼稚園のみんなもわしといっしょに『よいしょ』と声をかけてくれるかな。いいかな、さ、いくぞ。そりゃこそ、よいしょ、そりゃこそ、よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ。うん、なかなかよくなってきたぞ。よし、もう一度、そりゃこそ、よいしょ、そりゃこそ、よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ。ははは、みんなが手伝ってくれたおかげで、ずいぶんうまくいった。よし、それじゃあキュウリの種を蒔くとするか。そーれ、そーれ。うん、今度は水まきじゃ。お水をヒョイ、もひとつヒョイ、キュウリはたくさん水を飲むからしっかり撒いてやろう。お水をヒョイ、もひとつヒョイ。ははは、キュウリどん、たっぷりお水を飲んでくれ、そして、肥やしをたくさん食べて大きくなってくれ」

と、ごんべえさんは一生懸命キュウリの世話をしました。自分で土を耕して、種を蒔いて、水をやって。ごんべえさんは野菜を作ることがどんなに大変なことか、そして、どんなに楽しいことかを、ほんの少しわかったような気がしました。「ア、ア、アアアア。今日はちょっとくたびれた。また明日になったら様子を見よう。キュウリどん、おやすみ。大きくなっておくれ」

ごんべえさんはキュウリに優しく声をかけて、

家に入って休みました。

大きな月が出てきました。そして、その月が高く昇っていくと、あれれ、どうしたことでしょう、キュウリの芽が出て、スルスルスッと大きくなっていくではありませんか。スルスルスル、スルスルスル。そして、立派なキュウリの実がなりました。

♪コケッココー

と、鶏の音がしました。

ごんべえさんは目を覚まして、いつものように顔を洗って歯磨きをしようとしたのですが、ふと思いついて庭に出てみました。そして、大きくなったキュウリを見つけるとびっくりして、

「こ、ここここ、こりゃどうじゃ。キュウリができとるわい。できた、できた、できた、できた、できた。ははは」

ごんべえさんはキュウリを一つ、二つ、三つ取りました。そして、モグリへのお礼として、その中の一本を穴の中に投げ込みました。コロコロ、コロリン、とキュウリは穴の中に入って行きました。「モグリやあい。おかげでおいしそうなキュウリができたぞ。おまえも早速、食べるといい」

そうやって、ごんべえさんは、二本のキュウリを持って朝ごはんの準備にいきました。今日も、とてもいいお天気です。

(おわり)

ごんべえが穴に入る場面では、頭から真っ逆さまに地面に吸い込まれるように演じてもらった。モグリはハキハキした女の子の声で、ごんべえとの対話は園児と祖父をイメージしたものである。穴から地上に戻るとき、モグリの魔法が力を発揮する。このときの呪文の「もぐりん、もぐりん、ぐりりんぱ（このあとに願い事をいう）」は第5回、第6回でも使用することになる。モグリからももらった魔法の杖で畑を耕す場面では、思うように耕せないごんべえが園児たちに「みんなも一緒に『よいしょ』と言ってほしい」と頼む。声を出してくれるだろうと予想しての演出であった。ところがここで思いがけないことが起こった。大声で「そりゃこそ、よいしょ、そりゃこそ、よいしょ…」と言うとともに、年長組の園児を中心にごんべえと同じように鍬を振り上げて畑を耕すふりをし始めたのである。これで会場の空気が完全にひとつになった。このあとキュウリの蔓がどんどん伸びていく場面では「エー」という声が挙がり、また拍手。ごんべえはキュウリを見つけると「で

きた、できた」と踊りだすのだが、このときカゲ（附け）を打って、棒足¹¹⁾をして見得を切ってもらった。文楽人形の伝統的な技法を見せておいたのである。するとここでも観客全員から拍手がわき起こった。伝統芸能の力をまざまざと見せつけられた瞬間であった。盛り上がりという意味ではこの芝居が一番であった。

手遊び歌は「カレーライス¹²⁾」で、つつがなく終了した。

反省会での出演者の感想は次のとおり。

- 喜んでもらったのでよかった。
- 舞台の奥行きを使えて演技ができた。
- 人形の表情をつけるのが難しかった。
- 緊張感のあとのすがすがしさ。
- 小道具を作成。キュウリが一晩で生長するのをどうみせるか、ずいぶん考えた。
- モグリンの声を担当。ここぞというところで子供たちがすべて反応してくれた。
- ひとつの舞台を作るのがこんなに大変なのだということがわかった。終わった後の爽快な気分も味わえた。

育友会長は「子供たちがあんなに興奮して一緒に掛け声をしてくれて……。会場が一つになってとても楽しかった」と話された。

なお、前年に続いて奈良市教育委員会の方が来られた。

5 第5回と第6回の概要

ボランティアの方々には年齢層が高いのだが、園児の保護者は30代の方が多い。地域性もあって文楽はほとんどご存じではなく、テレビで観たことがある、という方がまれにいらっしゃる程度である。そういう方がわずか4回の稽古（1か月、毎週1回。稽古時間は1回につき約2時間）で10分あまりの芝居と20分程度の解説をするのは無理難題というものである。それを承知で成功させるためには演者の熱心な稽古が欠かせないのだが、創作する立場からいうと、まったくの素人でも不可能ではない動きで、しかも見栄えのする演技ができるように台本を作ることが重要なのである。その際、やはり長い歴史の中で蓄積されてきた伝統的な文楽人形の技法を借用することが有効だということを痛感した。具体的には前述の棒足や見得などさまざまな「型」、あるいは殺陣（たて）の約束事を取り入れることなどが挙げられる。

第5回は2015年7月2日。

芝居のあらすじは次のようなものである。

ごんべえは、最近腰や肩が痛くて、毎日同じような野菜作りの仕事を繰り返しているのがいやになっている。そして、農作業もせずに威張り散らして楽な暮らしをしている武士に憧れ、友だちになったモグリンの魔法で武士にしてみらおうと思いつく。武士に変身したごんべえが町を歩いていると、一人の娘が倒れている。わけを聞くと敵討ちの相手に巡り会えずに難渋していると言う。ごんべえが親切にしてやり、適当に付けた武士としての名前を名乗ると「その名前の人物こそ父の敵」と娘は戦いを挑んでくる。しばしの立ち回りの末、ほうほうの体で逃げてきたごんべえは元の姿に戻って野菜作りに専念する。

自分だけが苦勞していると思込みがちな人間の姿と、最善の努力をしつつ自分に見合った生き方をする喜びを描いてみた。

前半の解説では、この内容を理解できるように武士の生活や「敵討ち」についてクイズ形式で話しておいた。「仕返し」ともいえる敵討ちの話をするには逡巡や懸念もあったが、園長先生が「問題ない」とおっしゃってくださったので変更を加えなかった。

初めて男性の参加があり、ごんべえの主遣いをお願いした。立ち回りを取り入れたのだが、さすがに刀の遣い方など円滑であった。今回初めて娘人形を「お染」の名で芝居に登場させ、保護者の方が遣ってくださった。そして人形の動きの眼目は立ち回りと早替わりであった。立ち回りは吉田勘弥師仕込みの動きをアレンジしたもので、早替わりも文楽で見られるものを参考に独自の方法を考えた。文楽では、同じ首（かしら）の、衣装の異なった人形を持ち替えることで瞬時に早替わりができるが、我々には1体しかない。そこで、魔法をかけられたごんべえが、次第に舞台の蔭に下がって行き、客席から下半身が見えなくなるようにして袴を穿かせ、そのあと一気に姿を隠し、肩衣をかぶせるようにしてすぐに立ち上がるという形にした。小道具係の方は見栄えがするだけでなく、素早く着せられるような袴を工夫してくださった。小道具を担当して下さる方は「毎年小道具への要求が難しくなる」とおっしゃっていた。申し訳ないばかりである。



左の姿が2秒ほどで右のように変わる

出演者の感想は次のとおり。

- 子どもたちの反応がすごくよかった。
- 練習するたびに楽しくなっていった。
- 地域に住む「点」であった人たちが結び付いていく様子を魅せていただいた。
- 3人が一体となって人形に魂が宿る。

観客からは次のような感想が寄せられた。

- 子どもが小さいうちに貴重な体験をさせていただき、地域の皆様に感謝している。
- 動作も声も他の人形劇とは違った。
- 息がぴったりと合っていて、とてもすばらしく感動した。
- 立ち回りは見入ってしまった。
- テレビや広告でしか観たことがなかったものが実際に動いているのを見て楽しかった
- 少ない練習にもかかわらず、すばらしいものに仕上がっていてびっくりした。
- もっと難しいものかと思っていたのに楽しくアレンジされていた。

手遊び歌は「おべんとうばこのうた」。

「なら どっと FM¹³⁾」の取材があり、後日放送で紹介された。

第6回は2016年6月30日。

今回はボランティアの方に入れ替わりが目立ったが、スタッフは総勢30人を数え、過去最高になった。観客も優に100人を超え、これもおそらく最高であったと思われる。以前からこの“にわかグループ”に名前があればと思っていたので、試みに「劇団 トミーさん」という名前を付けてみた。「富雄第三幼稚園」は「富三（とみさん）」と略されることもあるようで、それをもじったのである。

前半の解説では、芝居で使う小判とハタキを知ってもらうために、例によってクイズ形式で紹介。人形の動きは縫い物の動作で説明して、芝居に入った。今回創作したのは桃太郎とかぐや姫の話をモ

チーフにした「ごんべえさんともものひめ」。

文楽は本来人情を表現する芸能なので、人形の姿や動きもそれにふさわしいものが伝えられてきた。そのことを念頭に置いて、園児たちがそこまで理解してくれるかどうかはわからないが、今回は親子の別れの哀しみと愛情をテーマに設定し、伝統的な技法を生かしてそれを表現するように試みた。

あらすじは次のとおりである。

ごんべえとモグリンが釣りにきているが、この川はゴミで汚れている。しかし、きれいにするにはお金もかかると、ごんべえが嘆いている。すると川上から桃が流れてくる。ごんべえは「これは桃太郎の桃だ、中から男の子が生まれて宝物を持ってきてくれるぞ」と喜ぶ。持ち帰ってモグリンの魔法で切ると、女の子が生まれた。

桃の姫と名付けられた女の子はとてもやさしく、掃除や料理や肩たたきをしてくれる。なおも鬼退治と宝物を期待していたごんべえは、桃の姫にそれはできないと言われ、ついふてくされてしまう。ごんべえが寝てしまうと、桃の姫は悲しそうに月を眺め、何かを置くとふわりと浮き上がりそのまま月の世界に飛んでいく。

明け方近くにモグリンが来て、目を覚ましたごんべえとともに置き手紙を読む。そこには、「実は自分がかぐや姫で、月に帰る」「自分はごんべえを父のように思っていたが、期待に応えられず、嫌われて悲しい」「月を見たら思い出してほしい」ということが書かれていた。ごんべえは涙を流してかぐや姫への愛情を訴え、後悔する。

モグリンが、かぐや姫の置き土産を見つける。それは小判だった。ごんべえは今さらお金などいらないと思うが、このお金であの汚れた川をきれいにすれば子どもたちの遊べる公園にできるかもしれないと思直し、かぐや姫の居る月に向かって一礼して、出かけていった。

かぐや姫の置き手紙に「私のことが嫌いだったのですね」と書かれたところを読んだごんべえは、「そんなことがあるもんか。鬼退治とか宝物とか、つまらんことを言って悪かった。わしは、お前と一緒に暮らしているほうが幸せだったんじゃ。子どもが一番大事なんじゃ。子どもが一番の宝物なんじゃ」と絶叫する。このような激しい感情の吐露は、浄瑠璃（文楽での語り）にはしばしばみら

れるもので、ここではそれを援用して、浄瑠璃の要素を生かしつつ子ども向けに平易に表現したつもりである。

手遊び歌は「大きな栗の木の下で¹⁴⁾」。

小道具として、桃はもちろんのこと、かぐや姫が月に飛んでいく時の小さな姿の紙人形も作っていただいた。



桃を切るごんべえ



かぐや姫の紙人形

出演者、関係者の感想は次のとおり。

- ナレーション担当。人形の動きと声を合わせるのが難しく、練習を重ねるたびに問題が出てきた。舞台裏にいたが、子どもたちが楽しんでいる気配が伝わってきた。
- 解説の桃の姫の主遣い。貴重な体験ができた。子どもたちが乗って観てくれた。
- 芝居の桃の姫の主遣い。みんなでアイデアを出し合い、だんだん形になっていき、本番が一番よい出来だった。
- ツケ打ち。力を合わせてひとつのものを作り上げていく喜びを体験できて感動した。
- 月の役。文楽に馴染みもなく、どうなるかと思ったが、台本がおもしろく、子どもたちも私たちも楽しめた。
- 役員。出演者の方々が時間外でも練習してくださって、本番はで子どもたちがとても楽しく声を出してくれてやりがいがあった。
- 園児たちの盛り上がる声を聞いて頑張って練習してよかったと思った。
- 裏方の大変さや喜びを体験できた。子どもたちとすてきな時間を過ごせた。

一方、観客の感想は次のとおりである。

- ストーリーは子どもたちにもわかりやすく、ラストはとても感動した。
- 予想の上を行く面白い話だった。大人でも楽しんで観ることができた。
- 人形の繊細な動きや小道具など、細部にわたりすばらしかった。
- ストーリーが親しみやすく、とてもおもしろかつ

た。子どもたちもとても喜んでた。

- 日本の文化の色の濃い人形劇に仕上げてくださり、そのできばえのすばらしさ、子どもたちの反応に大変感激した。

いずれも過分なお言葉であることは承知の上で紹介した。

当日は読売新聞奈良支局の記者が取材に来られ、奈良地方版で7月8日付の記事になった。次に一部抜粋しておく（個人のお名前はイニシャルに改めた）。

「黒衣の衣装に身を包んだ団員たちは、3人一組で1体の人形を操り、他の団員は舞台袖から語りや登場人物の声を演じた。ごんべえの声を受け持ったU.H.さんは「文楽人形の動きをテレビで研究しながら練習を重ねた。世代を越えて舞台を作り上げるのが楽しい。それが子どもたちにも伝われば」。熱心に見入っていたA.S.ちゃんは「最後に、もものひめがいなくなってさみしかった」と話していた」

6 幼稚園における文楽人形劇の意義

こうして6回の上演をおこなってきたが、その過程でさまざまな問題が浮き彫りにされ、また未来への展望が開けていった。今振り返ってこの催しの意義を考えると、主に次の3点が挙げられるだろう。

①園児の文楽人形への関心

この活動は「文楽」ではなく、文楽人形を用いた朗読による創作劇である。しかし、人形や語りの技法には文楽の要素を取り入れており、このような形ででも関西の伝統芸能への関心を持ってもらうことは無駄ではないと考える。国立文楽劇場では毎年夏に桐竹勘十郎師¹⁵⁾や鶴澤清介師¹⁶⁾の尽力で子ども向けの短い創作を上演しているが、規模や内容の高度さははるかに及ばないものの、精神は共通するものがあると信じている。

②多世代の地域交流活動

当初は学生による上演であったが、2回目以降は地元のボランティアの方々が参加、協力してくださっている。普段はばらばらに生活している方々が世代を超えて興味によって集まれ、その「興味」もまた「演劇」「文楽人形」「ボランティア活動」「幼児教育」「健康維持」などばらばらなのである。い

わば何もかもが異なった人たちがひとつのものを作り上げるところに、多世代の地域交流としての意味が生ずるのではないだろうか。

演者だけではない。園からの案内や噂を聞きつけて、地域の方はもちろん、同じ区域の小中学校の先生や未就園児の保護者の方々、さらには園の歯科医までもが見学にお出でになった。多くの方は、文楽人形の珍しさとともに、伝統的なものをどうやって幼稚園児に分かるように見せるのか、というところに関心を持ってくださったようにお見受けした。そして「自分もやってみたい」という気持ちになられて、次年度には演者として参加された方もいらっしゃったのである。

③生涯学習としての演劇活動

②で述べたことがボランティア参加者全体の意義とするなら、もうひとつこの活動は当初の企図を超えて、参加者個々人の生涯学習の意味を持つことになったのではないかと考えている。園児の保護者など、子育て世代にとっては、直接我が子の教育にかかわる内容について知見を広めることができ、みずから体験することで幼児教育の喜びや困難を「学習」し得たかもしれない。一方、子育てを終えた世代、さらには仕事をリタイアした世代になると、ボランティア精神が豊かで、まだ体力に自信がある。そして人生経験によって人の世の喜怒哀楽は知り尽くしている。そういう方が何か新たな生きがいや楽しみを見つけないと考える場合、演劇表現はうってつけだと思われるが、みずから役者として演ずるのは抵抗もあるだろう。しかし、毎年一時期の短期的な催しであり、黒衣に身を包んで人形に思いを託すことで自己表現のできる人形劇ならそういう問題もない。適度な運動にもなり、技術が向上する喜びもある。何年も続けると新しい人にアドバイスすることもできるようになる。さらに、孫が幼稚園に通う世代であれば「いいところをみせたい」と、いっそう意欲が湧くのではないだろうか。

最後に、峯園裕美園長から頂戴したメッセージを紹介して本稿を閉じる。

「日本の古典芸能に触れる機会にと、保護者や地域の方々の協力のもとで催しています。文楽人形を初めて目にする子どもたちは「お姫さまきれい」「本当に動いてるみたい」と、心が動き、お話の中に入っていきます。伝統芸能を子どもたちに伝えていき

たい。幼児期にこんな体験が出来て幸せだと思います」。

注

- 1) 吉田勘弥(よしだ かんや)師は文楽人形遣い。二世桐竹勘十郎師に入門して桐竹勘弥として初舞台。師の没後、三世吉田簀助師に入門して吉田勘弥となる。品のある女形や二枚目のほか、滑稽な役柄にも味がある。千里金蘭大学人間社会学部非常勤講師として「伝統芸能演習」を担当。
- 2) NHKテレビ「きらっと生きる」(2006年6月17日放送)、NHKラジオ第一放送「関西ラジオワイド」(2006年6月30日放送)、産経新聞(2006年6月25日付大阪市内版)、読売新聞(2007年9月22日付北摂版)、イギリスのバレエ雑誌「Dancing Time」(2006年4月)など。
- 3) 木村友紀氏は『炸』同人。歌集に『果実の記憶』(青磁社、2011)、エッセイに「女性歌人の恋歌」(『炸』に連載)がある。日本歌人クラブ選者賞(楠田立身選)受賞。
- 4) 木津川計氏創刊。200号をもって2016年6月終刊。菊池寛賞受賞。能、文楽、歌舞伎、演芸、宝塚歌劇、日本舞踊、現代演劇その他関西の芸能全般を扱った。筆者は同誌で2000年から2015年まで「文楽評」を担当した。
- 5) 差し金は文楽人形の左手を操作するもののことをいうが、ここでは雀に付ける長い棒。黒く塗ってゆらゆら揺らすように動かして鳥が飛ぶ様子を表現する。
- 6) 本来文楽人形は主遣い(人形全体と右手を扱う)、左遣い(人形の左手と小道具の出し入れなどをおこなう)、足遣い(人形の足を動かす)の三人一組で遣うが、このときは演者の人数の関係で、やむを得ず足遣いを省いた。この形では、人形の腰から下が着物だけになり、動きが不自然なだけでなく、重量感も生まれない。
- 7) 歌舞伎では役者の動きや鳴り物などに付ける効果音なので「付け(ツケ)」という。文楽では蔭で打つので「カゲ」。付け板を打って激しい音を出す。このときは雷の描写などに用いた。
- 8) 高田ひろお作詞、乾裕樹作曲。
- 9) 香山美子作詞、小森昭弘作曲。
- 10) 齊藤二三子作詞、フランス民謡。

- 11) 「棒足」は、文楽人形の技法で、見得を切る時などに片足をトンと地面に突いて、もう片方の足を斜め前に突き出す型。刀をかざしたり、両手を広げたりして派手なポーズとなる。
- 12) ともろぎゆきお作詞、峯陽作曲。
- 13) 同局の「地域学校関係情報番組」(2015年7月16日10:30、17日20:30、18日16:30の3回)
- 14) 作詞作曲不詳。
- 15) 桐竹勘十郎(きりたけ かんじゅうろう)師は文楽人形遣い。吉田簀助師に入門して吉田簀太郎と名乗り、2001年に父の名であった勘十郎を三代目として襲名した。立ち役、女形を問わず、当代の文楽人形遣いを代表する名手。
- 16) 鶴澤清介(つるざわ せいすけ)師は文楽三味線弾き。鶴澤道八師に入門して清介を名乗る。師の没後、鶴澤清治師に入門。鮮やかな音色と息の詰んだ演奏で聴衆を魅了する。作曲にもすぐれ、筆者の新作浄瑠璃『名月乗桂木(めいげつにのせてかつらぎ)』も清介師に作曲していただいている。

